小児慢性腎疾患の長期入院治療における問題点の検討

小児腎疾患の長期管理における運動・食事・社会心理に関する研究
長期管理に由来する社会心理的問題について

水野愛子　　児玉真澄　　牛田洋一

小児慢性腎疾患の長期入院治療における問題点を検討するため，腎疾患による長期入院（平均5年8カ月）と養護学校在籍を経験し現在18才以上（平均22.0才）の73例にアンケート調査を行った。57例（78.1%）が治療観察下にあり，4例が無職であった。入院時の学校の欠席期間が6カ月以上の者は25例（34.7%），学力が大変遅れていた者は23例（31.9%），入院中能力を十分伸ばせたと感じている者は10例（13.7%），不十分と感じている者は21例（28.8%）であった。退院後腎臓病あるいは養護学校在籍により不利益を得た者は各50例(70.4%)，34例(47.2%)であった。入院生活のプラス面として，病院での友人（58.9%）・教師（31.5%）・スタッフ（16.4%）との人間関係，病気の治療（39.7%），健康の大切さを知る（34.2%），勉学への復帰（26.0%），精神的強さ（20.5%）があげられ，マイナス面としては社会経験不足（56.2%）が最も多かった。性格やものの考え方に影響を及ぼしたものとして，入院生活の経験（53.4%），社会経験の不足（38.4%），運動の制約（27.4%），薬の副作用（26.4%），養護学校への在籍・友人関係の変化（各19.2%）があげられた。腎疾患治療への要望として，治療法の開発(82.9%)，成人期の医療費軽減（31.4%），入院期間の短縮（28.6%），診断法の進歩（27.1%），病気についての説明（24.3%）があげられた。

key words：小児慢性腎疾患，入院治療，社会復帰，養護学校

はじめに

腎疾患治療にはしばしば長期の入院を要し，成長期の小児にとっては，その間の家族や友人との離別，学業の中断，毎日の検査や治療，時には死への恐怖など，多くの問題が心理面に影響を及ぼす。早期診断と早期治療，疾患の予後判定の向上と生活管理基準の適正化により，腎疾患による入院は現在減少傾向にあるが，一方で長期あるいは頻回の入院が必要な症例も依然として存在する。今回私たちは，長期入院経験者を対象に，1）長期入院者の現状　2）長期入院治療の功罪　3）腎疾患治療への要望　に関するアンケート調査を行って，その問題点を検討した。

対象と方法

対象は，腎疾患により国立療養所中部病院への入院と養護学校在籍を経験し，現在18才以上である136例とし，1989年8月にアンケートを郵送した。

結　　果

17例は転居先不明で，73例(男46例，女27例)より回答を得た（回収率61.3%)。回答者の現在の年令は22.0±2.8才であり，腎疾患は，ネフローゼ症候群40例，慢性腎炎22例，慢性腎不全6例，IgA 腎炎2例，紫斑病性腎炎3例であった。入院期間は中部病院に3年10カ月±2年4カ月，他院に2年1カ月±2年2カ月，合計5年8カ月±3年2カ月（1年2カ月～13年）で

国立療養所中部病院小児科

Aiko Mizuno, Masumi Kodama, Yoichi Ushida

Department of Pediatrics, Chubu National Hospital

あり，入院は6才から16才に平均しており，退院は15才と18才にピークがあった。

1）現在の病状

完全治癒12例（16.8%），治癒し定期検査16例（21.9%），通院治療30例（41.4%），入院治療1例（1.4%），血液透析4例（5.5%），腎移植6例（8.2%），放置4例（5.5%）であった。

2）社会復帰状態（表1）

社会復帰状態は比較的良好であるが，4例が無職であり，2例はネフローゼの男性（20才と24才），2例は血液透析中の女性（20才と22才）であった。

3）入院時の学校の欠席期間（図1）

ほとんどない者と1カ月以内の者は計23例（31.9%）で，6カ月以上の者が計25例(34.7%)あった。

4）入院時の学力

病気にならなかった時に比し，入院時の学力が大変遅れていたと思う者23例（31.9%），少し遅れていたと思う者19例（26.4%），あまり遅れていなかった者17例（23.6%），すすんでいた者2例（2.8%），わからない者11例（15.2%）であった。

5）入院生活で能力（学力も含め）を十分のばせたかどうか

十分のばせた者10例（13.7%），まあまあのばせた者31例（42.5%）に対し，不十分であった者は21例（28.8%）であった。

6）腎臓病である（あった）ことによる退院後の不利益の経験

あったとする者は71例中50例（71.4%）で，就職時32.4%，進学時25.4%，結婚時8.5%，その他22.5%であった。

7）養護学校在籍による不利益の経験

あったとする者は72例中34例（47.2%）で，就職時29.2%，進学時19.4%，結婚時4.2%，その他2.8%であった。

8）中部病院での入院生活が人生でプラスになった点（3項目まで選択）（図2）

病院での友人関係をあげる者がもっとも多く，教師とのかかわり，病院スタッフとのかかわりを含め，人間関係が多くあげられた。入院本来

問　あなたの現在の職業は？

職　業	男	女	計	（　%　）
会社員	11	7	18	（24.6）
公務員・団体職員	2	1	3	（4.1）
製造業	3	0	3	（4.1）
機械加工　2，自動車整備　1				
建設業	1	0	1	（1.4）
サービス業	7	4	11	（15.1）
病院職員　2，調理師・理容師・歯科技工士・柔道整復士・プログラマー・保母・塾教師・ジャーナリスト・不明　各1				
小売業	2	0	2	（2.7）
学生	18	9	27	（37.0）
大学生　14，専門学校生　9，予備校生　2，高校生　2				
主婦	0	4	4	（5.5）
無職	2	2	4	（5.5）
計	46	27	73	（100.0）

表　1

問　入院する時点までの学校の欠席期間は？　（72例）

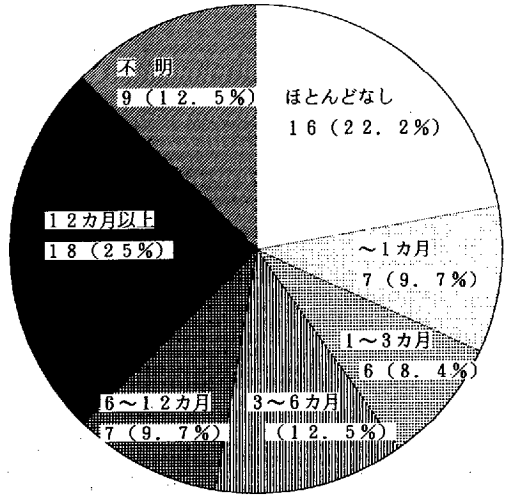

図　1

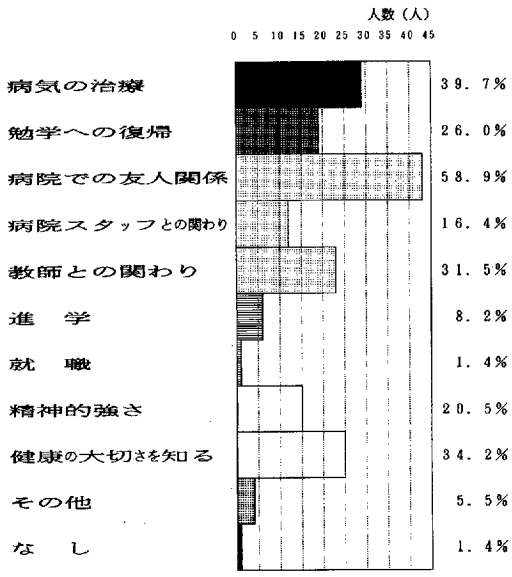

図　2

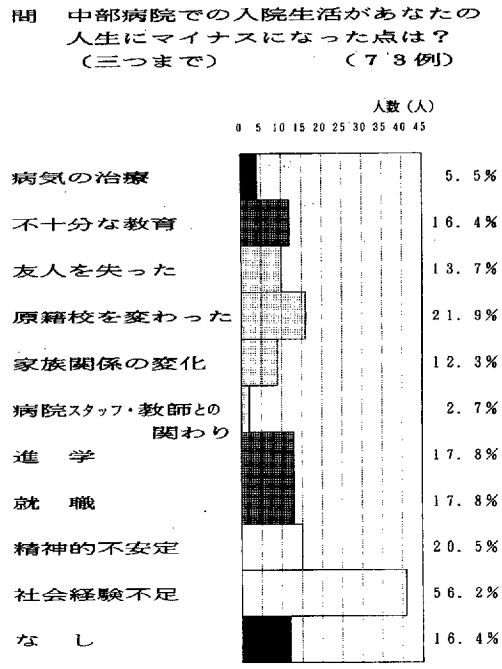

図　3

の目的である病気の治療は39.7%，勉学への復帰は26.0%であった。その他，健康の大切さを知る，精神的強さの精神面のプラスもあげられた。

9）中部病院での入院生活が人生でマイナスになった点（３項目まで選択）（図３）

社会経験不足と精神的不安定との回答が多く，次いで原籍校を変わった，不十分な教育，進学，就職と学校に関わるものが多かった。

10）性格やものの考え方に強く影響を及ぼしたもの（３項目まで選択）（図４）

入院生活の経験，社会経験の不足，運動の制約，薬の副作用，養護学校への在籍・友人関係の変化，社会の無理解の順に回答が多かった。

11）腎疾患治療に望むこと（３項目まで選択）（図５）

治療法の開発と診断法の進歩の医療の進歩を望むものが多く，成人期の医療費軽減，小児科内科の連携といった退院後の問題，入院期間の短縮，病気についての説明，教育環境の充実などの入院生活に関わるものがあげられた。

考　　案

小児の長期入院治療に際しては，心理的安定とともに知的・精神的発達が考慮されるべきで，病棟内の院内学級設置はその一助となる。当院の小児科入院患者の９割以上は慢性疾患による紹介患者で，隣接する愛知県立大府養護学校（小～高等部）で教育を受けており，この調査は過去12年間の入院患者側からみた実態を示すものである。当院に入院の時点で半数近くに３カ月以上の学習空白があり，３割強が学力の遅れを強く感じていた。入院生活のプラス面として人間関係や精神面が多くあげられ，マイナス面として社会経験不足や精神的不安定が多くあげられたこと，腎臓病の既往や養護学校在籍が進学就職時に不利益を与えている事実は，治療的側面の向上とともに社会心理的配慮が重要なことを示している。

アンケート結果より，長期入院治療における社会心理的問題に対して配慮すべき点をあげると以下のようである。

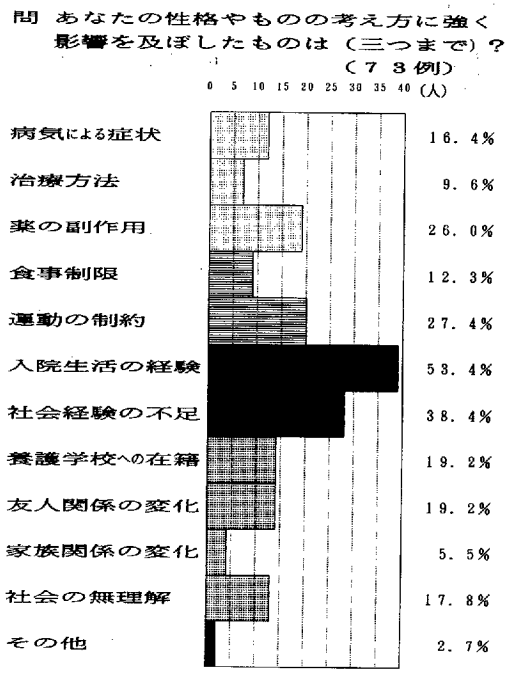

図 4

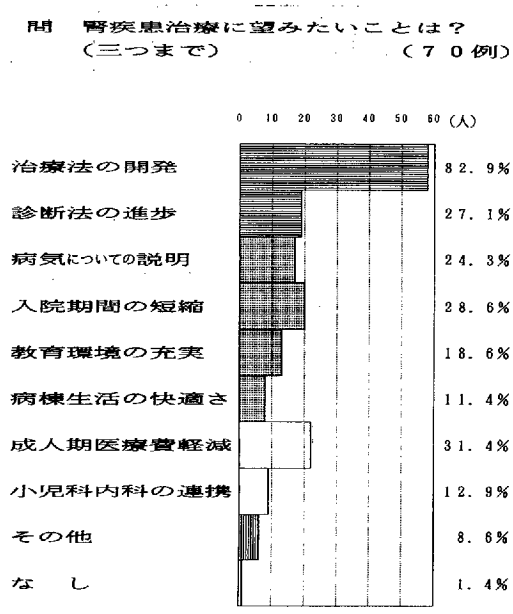

図 5

1）入院生活の質的向上
　良好な人間関係（友人を作り得る環境）
　適正な（厳しすぎない）運動・食事
　十分な（社会復帰可能な）教育
　生活時間の多様化と弾力性
　社会・家庭とのつながりを保つ
2）家族・本人とのコミュニケーション
　疾患・治療についての教育
　家族のかかえる問題へのかかわり
3）卒業後の進学・就職対策
　養護学校への偏見の除去
　実績作り
4）薬物副作用の軽減

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

小児慢性腎疾患の長期入院治療における問題点を検討するため,腎疾患による長期入院(平均5年8ヵ月)と養護学校在籍を経験し現在18才以上(平均22.0才)の73例にアンケート調査を行った。57例(78.1%)が治療観察下にあり,4例が無職であった。入院時の学校の欠席期間が6ヵ月以上の者は25例(34,7%),学力が大変遅れていた者は23例(31.9%),入院中能力を十分伸ばせたと感じている者は10例(13.7%),不十分と感じている者は21例(28.8%)であった。退院後腎臓病あるいは養護学校在籍により不利益を得た者は各50例(70.4%),34例(47.2%)であった。入院生活のプラス面として,病院での友人(58.9%)・教師(31.5%)・スタッフ(16.4%)との人間関係,病気の治療(39.7%),健康の大切さを知る(34.2%),勉学への復帰(26.0%),精神的強さ(20.5%)があげられ,マイナス面としては社会経験不足(56.2%)が最も多かった。性格やものの考え方に影響を及ぼしたものとして,入院生活の経験(53.4%),社会経験の不足(38.4%),運動の制約(27.4%),薬の副作用(26.4%),養護学校への在籍・友人関係の変化(各 19.2%)があげられた。腎疾患治療への要望として,治療法の開発(82.9%),成人期の医療費軽減(31.4%),入院期間の短縮(28.6%)診断法の進歩(27.1%),病気についての説明(24.3%)があげられた。